番組

一、お囃子　滝沢　仁美

一、落語　生徒小噺

一、落語　柳家　蝙よし

一、落語　笑福亭　和光

仲入り（きゅうけい）

一、太神楽曲芸　翁家　喜楽

一、落語　桂　米多朗

桂 米多朗

翁家 喜楽

笑福亭 和光

柳家 蝙よし

◎落語の始まり

落語の始まりは室町時代末期から安土桃山時代にかけて、戦国大名のそばに仕え、話の相手をしたり、世情を伝えたりする「御伽衆」と呼ばれる人達でした。その中の一人安楽庵策伝という浄土宗の僧侶は、豊臣秀吉の前で滑稽なオチのつく「噺」を披露して大変喜ばれました。後に、京都所司代の板倉重宗に頼まれて、千余りにものぼる小噺を「醒睡笑」という書物に記しています。江戸時代に入り有料で噺を聞かせる人物が登場します。大阪では「露の五郎兵衛」、江戸では「鹿野武左衛門」などが活躍しました。

◎落語のスタイル

扇子と手ぬぐいを持った一人の演者が、座布団の上に座って滑稽な話をします。噺家は声色や仕草を交えて、老若男女全ての登場人物を演じ分けます。つまり、話芸だけで、お客様は自由に想像力を膨らませ、頭の中に絵を描き出すことにより極上の笑いをかもし出します。

◎落語の形

上下（かみしも）

一人の噺家が複数の登場人物を演じ分けるため、顔を左右に向けて話します。身分の違いや、家の内と外で会話する場合、目下の者や外から話しかける時は、上手（客席から見て右）を向いて話すことなどが決められています。

持ち道具

扇子と手ぬぐいの二つを持ち、この小道具をいろいろな形に使いながら、落語の世界を創っていきます。扇子はお箸・筆・刀・キセルなどに。手ぬぐいは財布・煙草入れ・巾着などに見立てて使われます。

オチ（さげ）

江戸時代落語は「落とし噺」と呼ばれていました。主なものとして、地口オチ・とたんオチ・仕草オチ・考えオチ・間抜けオチなどがあります。

マクラ

マクラとは噺の本題に入る前にしゃべる、ちょっとした世間話や小咄のことです。事前に演題を発表しない寄席では、噺家はマクラでお客様の反応を探ってどんな演目にするか選びます。

◎寄席のいろいろ

寄席というのは人を集めて芸能を催す「人寄せ場」の略です。今から約200年程前に常設寄席（定席）が始まりました。江戸時代には200軒あった寄席ですが、現在は都内に4軒残っています。寄席では落語と色物と呼ばれる『見て楽しめる』ものが次々と登場します。寄席の一日は太鼓で始まります。開演の30分前に「一番太鼓」が鳴ります。（トンドンドンドコイ、ドンドンドントコイ）と打ちます。これを合図に開場です。次に、開演直前には「二番太鼓」が鳴ります。（オタフクコイ、オタフクコイ）と打ちます。着到（ちゃくとう）とも呼ばれる太鼓で間もなく開演です。出囃子と共に開口一番、前座さんの登場です。その後も仲入り（休憩）の太鼓、トリ（一番最後に出る方）が終わると追い出し太鼓を打ちます。別名「薄情太鼓」とも呼ばれ（デテケ、デテケ、デテケ）と打ち、これで寄席の一日が終わります。この太鼓、実は噺家（前座）が叩いています。

◎噺家（前座）の修行

噺家には階級があります。噺家になると《前座》⬇《二ツ目》⬇《真打》と厳しい修行を経て階級が上がっていきます。真打になるまでには、15年くらいかかります。前座の修行は大変です。落語を覚えるのはもちろんのこと、太鼓も覚えなければなりません。その他、先輩方にお茶を出したり（個々の人の好みを覚えなければなりません）、着物をたたんだりと大変忙しく、覚えることがたくさんあります。前座修行を4年間努め晴れて二ツ目昇進です。これからは、自分の芸をみがかなければなりません。噺家はいつまでも芸の勉強をしなければならないのです。

協藝

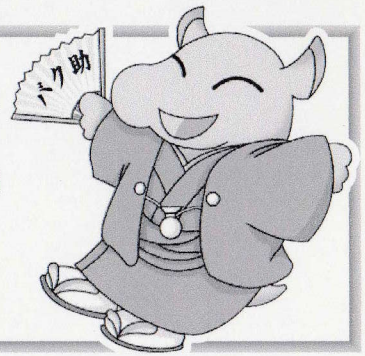
〒160-0023
東京都新宿区西新宿6-12-30
芸能花伝舎2階
公益社団法人　落語芸術協会
TEL.03-5909-3080　FAX.03-5909-3082
www.geikyo.com
info@geikyo.com

●公益社団法人　落語芸術協会

公益社団法人落語芸術協会は、寄席芸能を広く普及し後生へ伝える為、昭和5年10月に日本芸術協会として設立。昭和52年12月に法人許可され「社団法人落語芸術協会」と改称。平成23年4月に「公益社団法人 落語芸術協会」と改称。噺家と色物（曲芸・漫才・奇術・紙切り・俗曲等）お囃子を入れ、会員数200名（平成25年現在）の大所帯である。当協会は寄席芸能の責任団体として、東京の寄席の出演を始め全国各地の会館や学校で主催される、寄席（落語会）の企画制作を行い、落語の普及に尽力している。

また、寄席以外に継承にも力を入れ、年間約90ステージに及ぶ若手による落語会を催している。

現在、会長の桂歌丸のもとに演芸関係のリーダー格として位置付けられている。



みなさん初めまして、ぼくはバク助です。
落語芸術協会のマスコットキャラクターとして生まれました。
どうしてぼくがマスコットになったかというと、落語をもっと子供のみんなにも聞いてもらいたいと思ったからなんだ。
「落語」ってちょっとむずかしそうな感じがするよね。
話しかたなんかも今とは少しちがうし、名前なんか聞いたこともない道具がいっぱい出てくるし、はじめてだとわからないことだらけだよね。
そんなむずかしいことをぼくがわかりやすくおしえてあげるよ。
でも、ぼくも生まれたばっかりだからぜんぶ知ってるわけじゃないんだ。

けどこれから落語のことをいっぱい勉強していくからだいじょうぶ。
だからみんなもぼくのことを応援してね。